過保護っ子ノイのお産

木村　龍司

1

一度は恋をさせたい！

わが家にノイが来た時からタイミングを待っていたのだ。あのいたずら小僧？も、もう二歳半、身体も心もすっかり大人に成長した。可能だと言うだけで、遊び盛りの子に母親役をさせたくなかったし、人間様の方にも充分時間のある時期が好ましいと考えていた我々にとって、丁度夏休みに出産予定と言うのは、又とないチャンスであった。二歳半と言うことは人間の歳に直せば二十四・五歳、結婚適齢期である。

「おい、どうする、ノイ子、お婿さん貰うかい？」

「・・・クフン・・・・フン。」

そんな訳で、わが家でノイ子の結婚が決定したのは四月初めのことであった。

中には、シーズンが来ると云う事イコール母親に成れる事と思い込んで、初めてのシーズンからもう仔犬を産ませようとする人もいる様だが、これは避けた方がいい。せめて一歳半から二歳になる迄はどんなに仔犬が欲しくても待つべきだろう。

ノイのシーズンは正確に年二回、少々太り気味だが体調はすこぶるいい。もともと、牡を飼うか牝を飼うかについて考えた時に、犬の世界ではよほど良い牡ならば別だけれど、ありきたりの男前ではお嫁さんに恵まれるチャンスがあるとは保証できないし、さりとて牡牝ペアで飼うのは大変だしで、結局、男と生まれて一度もなにできないっていうのも可哀そうだと言う事で、女の子ならお金でどんな男でも買えるからと言うのが、わが家で牝を買うことになった理由の一つでもあったから、彼女が女盛りになった今、愛しいお婿さんを見つけてやらねばなるまいということになった。

なにしろわが家でお産は初めての経験である。犬のお産は軽いというのが昔からの言い伝えだが、いろいろ調べてみると、現代の都会で野生を失った飼われ方をしている犬達のお産は、一概に安産ばかりとは言えないようだ。夏休み中なら彼女の面倒もじっくりと見てやれるはずである。

「それでは決定、ノイは今年結婚しまーす。いいか、ノイ子？」

「ワン・ン・ワン」

夏のお産について早速掛かり付けの獣医さんに相談をかける。

「ああ、ノイちゃんなら、大丈夫ですよ元気一杯なんだから。」

どうやら安心そうである。

急いでお婿さん捜しを始めなければならない。わが家のノイはブラックである。母親もブラック、父親もブラック、母方の祖父母は不明だが父方の祖父母はブラックだから、彼女がブラックなのは至極当然のことである。同じ黒でもラブラドール・レトリーバーの黒は他の犬種の黒毛とはひと味違って極めて艶やかで美しい。黒という色の性質から、きりりと引き締まった感じも捨てがたく愛好者も多い。ラブラドールにはこの他にクリームとチョコ

レートの三色があるが、これらの色も、またそれぞれに独特の味わいがあって毛色による優劣は付けがたい。どの色のも飼ってみたいのが人間の欲望だが、それが果たされないとなれば手もとに居ない色のが欲しくなるものである。

「クリーム色の赤ちゃん、きっと可愛いわよ。」

ということになって、クリーム色のお婿さん捜しが始まった。クリームの因子よりブラックの因子の方が優勢である。「クリーム色の赤ちゃん」を得る為には、よほどクリームの因子を強く持ったお婿さんを見つけなければならない。残念ながら日本には、増えてきたとは言ってもまだラブラドールの数が少ない、まして、優秀な子種を授けてくれるクリーム色のお婿さんとなるとなかなか見つからないものである。数が少ない犬種だけに、好いのが居たと思うと血縁関係が有ったり、交配に立ち会ってもらっては困るとか、産まれた仔犬の中から牝を何匹戴きますとか言った気の進まない条件付きだったりして、破談にすること数件。年頃の娘を持った親の苦労が分かるような気がしてくる。クラブの仲間・知合いの獣医さん・訓練士さんとあらゆる所に声をかけるが、なかなか芳しい話は聞こえて来ない。たまに聞こえてくる良い男の話は、北海道とか九州とか遠い地方のものばかりである。

犬の場合は・・・人間の場合も同じかも知れないが・・・男の方がデリケートらしく、結婚する時も婿さんの方は家から動かさず、嫁さんの方を相手の許に連れて行くのが常識である。中には交配のために、牡の所へ飛行機や汽車を使って牝を送り、ことを済ませるむきもある様だが、わが娘の結婚には、やはりなんとか立ち会ってやりたい。

「どうしようか？京都に良いのが居るって話だけど、京都まで位なら東名高速飛ばしてって日帰り出来ない事はないねえ。」

「でも、疲れるわよ、貴方もこの子も。日本にもアメリカみたいに犬を泊めてくれるホテルが有れば良いのにね。」

そんな話がわが家で交わされる様になった頃、出入りの訓練士さんがお見合いの話を持って来てくれた。候補者は「金のわらじで捜せ」と昔から言われる一つ歳下の男の子、色はクリーム色で、名前はマック、甘えん坊だけれど訓練性能は抜群でJKCの訓練チャンピオン、お家もわが家から目と鼻の先の歯医者さんだと言う。とりあえず将来産まれてくることになるであろう子供達に母親の持つ諸々の免疫性を伝えてもらうために、獣医さんに来て戴いて注射をしてもらう。これで一応の準備はOKだ。

ノイのシーズンも近付いていることゆえあまりのんびりもしていられない。早速、鈎書ならぬ血統書を見せてもらう。どうやら彼は特に名門のご出身と言うわけではないようだ。

人間にしろ犬にしろ名門の出かならずしも総て優秀とは限らない。庶民出身大いに結構、ちょっと気になる点も有るがその犬舎の犬が総て悪い訳でもないはずで、特に劣悪な血統を受け継いでいない限り問題はその子自身である。面白いことに同じ犬種であっても個体差は非常に大きく総ての面に現れるもので、それは精神面においても例外ではなく、数匹の犬達が集まれば必ず気の合

う奴と合わない奴が出てくるのは人間社会とそっくりである。犬の社会においても気に入った相手に対しては極めて親切だが、そうでない場合には相手に極めてそっけない態度を示すのが常である。これはあるコリーのオーナーの話しだが、交配のために女の子が泊まりがけでやって来ることが何度か有ったそうだ。ある雨の日のこと、そこが自分の家である男の子は雨に当たらない場所を占拠して、彼女の方は哀れにも雨の当たる場所に追いやられていたので、犬の世界っていうのはそういうものかと思っていたところ、たまたま、又雨の日に来あわせた別の彼女に対しては、彼女に雨の当たらない場所を譲って自分は雨に濡れて居たそうである。ラブラドールの場合も、気が合わないからと言って喧嘩を始める様なことはしないけれど、気にいらない相手にたいして親切な態度を取らないことは、前記のコリー君の場合同様事実のようだ。父兄としては心配である。家のノイ子に邪険な態度をみせる彼氏だったら許せない、絶対婿さんになんかしてやらない。それに彼氏の体型などもこの目で見ないことには安心できない。

吉日を選んで見合いの席を設ける。案ずるよりは産むが安し、彼氏はノイ子に極めて親切だ。確かに甘えん坊だが、顔つきは穏やかでなかなかの二枚目である。体型もしっかりしていて脚も太い。難点を捜せば無いこともないが娘の相手を百パーセント気に入る親もないだろう、他にこれと言う相手が見あたらない現在、あまりぜいたくばかりを言ってもいられまい。父兄としては目をつぶろう。ノイの方もすっかりその気になったようだ、互いに相手の臭いをいとおしそうにかぎあっている。ノイは子供の時から家の中で成長したせいか、同じように家の中で飼われている犬とはすぐ仲良しになる癖がある。それは女の子に対しても男の子に対しても変わらない様だ。当事者同士はどうやら合意点に達しているらしい。

残念なのは、現在の血統書には歴代の毛色が記されていないので、彼氏がどの程度クリームの因子を持っているかが血統書を見ただけではまるで分らないことである。懇意の繁殖者から譲り受けた子であれば、数代前に遡って毛色ばかりでなく様々な事が聞き出せるけれど、犬を手にいれる迄に何人もの仲介者が入ったりした場合には分らないのが普通である。

一般に、多くの愛犬家達は何種の何色の子が欲しいとなったら、どうしてもその子だけに目が向いてしまうのが常である。聞いてもせいぜいその子の親の事ぐらいで、血統書で気にするのはチャンピオンの印が付いたのが何頭含まれているかと言う程度であろう。愛犬家にとっては、その時は欲しかった対象のその子だけが問題なのであり、関心の総てがその子に向かうのは至極当然の事なのだが、何年かして、さて子供でも産ませようかとなった時には、歴代の祖先達のことはもう分らないと言うケースが多い。そして、「蛙が蛙を産む」ということは、犬の場合にもやはり難しいことなのだ。親切な仲介をしてくれる業者の場合にはそれでもなんとか調べてくれるけれど、お互い手間も暇もかかる事だから、出来るだけの事は仔犬を引き取る時に調べて記録して置いたほう

がいいのだが・・・。そんな訳で、ノイの婿さん候補の二枚目君もクリームの因子をどれだけ体内に備えておいでなのかは分らなかったが、彼の艶やかなクリーム色の毛並と立派なこう丸とに期待して、結婚の儀を執り行うことにした。

鶴鴿に「とつぎの道」を教えられたと言う神代の昔はいざ知らず、現代の人間の若者達ならお床入りのすべなどは、誰に教えられなくとも、世の中に溢れている週刊誌・婦人雑誌・スポーツ紙の類から総て先刻ご承知だから、惚れたもの同志二人放って置けば勝手にそのうち子供ができるけれど、裏ビデオにもポルノチックなご本にも、とんと興味を示さないワンちゃん達のことゆえ、子供の時などはじゃれあって牡牝かまわず乗っかって腰振りダンスに興じていた姿は見知っているものの、それは性的なものとしてよりも自分の優位を誇るための仕草と言う説もあり、牝が牝の上に乗っかっているのなんかを見ると、それも本当みたいな気がするから、お互い同志気に入っている様子だからといって、後は二人でお好きにどうぞと云う訳にはいかない様である。ワンちゃん達だって何日か一緒に置いといて直えるのなら、それこそ庭に飛来する鶴鴿のお尻の振り方なんか真似しなくたって自分でちゃんと子供ぐらい作れるだろうけれど、どっこい飼主の方は他所様の愛犬をそう長くは預かっても預けても居られない。その点可哀そうだがいたすことをいたしたら、ハネムーンは無し。効率良くベビーチャンをお腹に宿してもらいたいのが人間様のご都合である。

かくて、双方の飼主と、ベテランの訓練士さんが介添役を勤めることと相成った。

結婚式の日取りを決めなければならない。墨子ちゃんじゃないけれど、できてると思ったのにィーーーでは都合が悪い。

犬の場合、普通シーズンは二・三週間位であるが、その期間ならいつでも妊娠するというものではない。シーズンが来てから十二・三日が一番妊娠の可能性が有る日とされている。ノイの場合十二日目は六月十四日だが出席者である人間様の方がその日はどうしても都合が悪い、仕方がないので一日前の六月十三日の午後と決定。

「待て待てマック！そんなに慌てるなってば！お嫁さんは逃げやしないよ。」

彼はどうやら久しぶりの女性を眼前にして気が焦るらしい。せわしなく腰を振りながら前進前進また前進をつづけるのだがどうもうまく参らない。彼女の方は尻尾を九十度真横に曲げて受入態勢OKのポーズである。心なしか彼女の目はうるんで見える。

この先の描写は「四畳半襖の下張り」じゃないけれど、クラブの会報オッターテイルが発禁処分なんてことになっても困るから、以下省略・・・。

こう言う事にはベテランの、訓練士さんの手を借りて、事は一件無事終了。気疲れしたのも肉体労働したのも両方の飼い主の方で、乱れた室内を片付ける飼い主の女医さんを眺めながら、彼も彼女も至極満ち足りたお顔であった。

「まず間違いなく大丈夫ですよ。」
訓練士さんの太鼓判ではあったが、彼と彼女の顔を見ながらコーヒーなど喫しているうちに、何だかたった一度だけというのも可哀そうと言う想いが、双方の飼い主に涌いて来て、
「念のためにもう一度、続けてだと男の方も疲れて良くないから、一日置いて明後日にでも逢わせてやりましょう。」
ということに相成った。
ノイは彼氏がよほど気に入った様である。家に帰ってからも窓から夕暮れの空を眺めて「クゥーン」と、日頃は発したことのない様な声を出していたのには、こちらの方が切なくなった。そんなノイ子であったから、二度目はお互いもの慣れて介添役の労も半減した。これでご懐妊は間違いないだろう。

2

それからが大変である。妊産婦を抱えると考えなければならない事がたくさんある。
早速ドックフードをサイエンスの成犬用から母犬用に変える。現在のドックフードは完全栄養だとはいうものの、人間の目で見ると成犬用も母犬用もどちらも同じコロコロの玉っころでちょっと物足りない。妊娠しているからといって栄養過多による肥満は禁物だが、何かが不足というのもまた困る、そこで妊婦の食事にはいろいろと気を使うことになる。
犬用の粉ミルク、これはどっさり与えても良い様だ。カルシュウム剤、やたら用いると変に骨を硬化させて良くないらしい、それより煮干の様な天然の物の方が犬も喜ぶし体にも良い。
運動は過労にならない様に気を付けなければならないが、出来るかぎり普通どうりの方が良いらしい。
「ノイのベットどうしょう?」
「今のベットじゃちょっと丈が高すぎるわね。」
ノイは四十六日目で家に来た時から、我々のベットの横に置いたサークル付きのベビーベットを使っている。それは六十センチ位の高さなのだが平素は身軽にひょいと飛び乗ったり飛び降りたりを気軽にやっている。しかし、お腹の大きくなったノイ子を想像すると、ベットへの乗り降りが大変そうである。お腹をぶつけて流産なんてことになっては大変である。早速とり片付けることにする。ベビーベットの分解作業をそばでじっとみつめているノイの目は明らかに「わたしのベットーーー」という顔である。マットレスだけ外して涼しい窓側に置いてやる、これでやっと納得。
階段の登り降りも出来るだけゆっくりさせる様に注意しなければならない。
胎教を考えてなるべく叱らない様にする為にノイが叱られる状況にたち至ることのない様に心がける。
次は産室の準備である。お産をする場所は何よりも安全で犬が落ち着ける場所でなければならない。ということになると、ノイにとっては家に来た時から、ずっと夜を過ごして来た我々の寝室が最適の場所であろう。ベットルームの一隅をそれに充てることにする。ノイはあまり暗い物陰や机の下といった場所は好まない、

が、お産に際しては余りあけっぴろげで明るいのも具合いが悪いであろう。生まれたチビどもは所定めず這い回るから、仔犬達の行動を制約するためのサークルが必要である。厚手のビニールシートを買って来て絨毯の上に敷き、二十センチ幅の板で一畳強の囲いを作り、一部に柱を立ててサンシャツトカーテンでアラビヤの王様風に天幕を張る、中に入って見るとハックルベリーフインの隠れ家みたいで意外と居心地が良い。どうやらノイも気に入った様子でクンクンやっている。サークルの接する壁面には汚れが付着しない様に、広く透明なビニールシートを買って来て張り巡らす。これで何とかなりそうである。後は月満ちてチビどものご誕生を待つばかりである。

犬の妊娠期間は一般に六十二・三日。従ってノイの出産は八月十四・五日になるはずである。

一ヶ月が過ぎた。お腹の大きさも目立ち始めたがノイの日常に変化はない。梅雨が終わり日増しに暑さが厳しくなる、強い日差しを避けて日がおちてからの散歩がすがすがしい。余り急激な運動は、そろそろさせない方が良いのだろうが、草原へ来ると大好きなボール投げをせがむし、河原へ連れて行けば泳ぎたがる、とにかくこちらが驚くほどタフな奴である。しかし、一ヶ月半が過ぎた頃からはさすがに地上を歩くよりは水中で重力を制御した方が楽らしく、泳いでいる時の顔は妊娠前に戻った身の軽さを楽しんで居る様であった。とにかくお腹の中の子供達も無事順調に成長している様である。

3

八月になった。大きなお腹はますます大きくなり、乳房もふっくらと柔らかな丸みを見せてもりあがっている。

毎日暑い日が続く。ノイの食欲は旺盛だが、さすがにたいぎそうでクーラーのきいた屋内に居ても、もともとたれ目のアカンベーをより垂れ下げて「わたし一体どうなっちゃったの？」とでも云いたそうな顔つきである。彼女は初産だし妊娠した仲間を見たこともなければ、逢ったこともない。自分の身体的変化が、マックと恋をした結果であることに、この時は未だ思い至っていなかった様である。この時はと云うのは、後に再びマック氏とバーベキューパーティで出会う機会があり、シーズン中でも実際の行為をいたした訳でもないのだが、マック氏に執ように迫られた後では、どうやら想像妊娠をしたらしくきれいにひっこんでいた乳房を再び膨らませてしまった事があったからである。

ラブラドールは演技犬だ。くらしくするのは大のお得意である。

「ノイちゃん大丈夫？」

「産まれそうになったら教えるんだぞ、頑張れよ！」

などと声を掛けると、

「わたしもう駄目！もう産まれちゃう！」

と云った顔をする。息使いまで荒くなる。

八月も十日になった。予定日にはまだ四・五日あるが朝からなんとなく様子が落ち着かない。経験豊富な繁殖者に聞いたところによれば、いよいよお産の日には朝からなんにも食べなくなると

云うことだけれど、ノイ子は今朝もしっかり朝飯を平らげた。また、産室の床をガリガリ掻く動作を頻繁に行うとも言うけれど、室の隅に一か所その形跡があっただけである。しかし、例の垂れ目は一層はなはだしくなり、鼓腹をひくひく動かしている様はまさに風雲急を告げている様に見えた。予定日と云うのは決定日ではないから予定なのだ。早産と云う事も有り得るではないか。慌てて潮時を調べ、急いで獣医さんに電話を入れる。なにしろ初めての事なので産まれる時には獣医さんに立ち会って戴く様に前々からお願いはしてあった。人間の赤ちゃんは潮の満ちてくる時間に産まれると云う、犬の場合にもこれがあてはまるのかどうかは分からないけれど、潮が満ちて来るのにはまだ時間がある。頼りの獣医さんが到着するまでは何とかもちこたえそうである。

「もうちょっと我慢しろよ！予定日はまだ四・五日先だぞ」

と云ったのがいけなかったのかどうかは知らないけれど、忙しい中を駆けつけてくれた獣医さんご夫妻に尻尾を振らしてご挨拶はしたものの肝心の産気の方は一向に進行しない様である。お産は夜中になる事も多いと云うことで獣医さんご夫妻には泊まって戴く事にして、人間の方はとりあえず一杯やりながら気長に待つことにした。ところがノイの方は大好きな獣医さんご夫妻の顔を見て安心したのかすやすやとおやすみである。どうやら今夜のお産はなさそうだ。

十一日、のんびり起きて高校野球を見ながら一日待つが、産気至らず食欲旺盛、ガリガリ床を引っ掻く動作は時々示す。取り合えず仔犬達に産湯を使わせるためのタライを買いに行く。人間の赤ちゃん用のを買って来て皆に笑われる。池田高校・関東一高快調。獣医さんご夫妻諦めて逗留。

十二日、日航機事故のニュース番組と高校野球を日なが一日見て暮らす。ノイの方は「今にも産まれそう！」と云う顔をしながらも食欲旺盛。獣医さんご夫妻その顔にほだされて予定変更して逗留。池田高校やっぱり強し。

十三日、引続き日航機事故のニュース番組と高校野球で一日暮れる。獣医さんご夫妻お盆休みの旅行計画をやむをえず変更させられて逗留。ノイ子相変わらず床を引っ掻きながらも食欲旺盛。何かあっては大変と、ここのところ散歩に連れ出していなかったのだが、毎日フウフウ云っているノイ子にも気分転換が必要ではと、夕食後、

「まだなら散歩にでも行くか？」

と、試みに聞いたところが、大きなお腹をえんやらやと持ち上げて立ち上がったので一同打ち揃って酔い覚ましを兼ね、夜の公園に出かける。夜風が心地よい。考えてみれば獣医さんを引き連れてのぜいたくな散歩である。

十四日、ノイ、朝から相変わらず食欲旺盛。最初のデートで妊娠していれば今日が予定日である。しかし様子は昨日と変わらない。

「ノイちゃん今日も産まれそうにないから、僕ちょっと仕事に行って来ようかな」

獣医さんがそう云いながら白衣をはおり始めた途端に、人の動きを目で追っていたノイが急に産気づいた。

「ああ、やっと産む気になった様ですね」

それとばかりに準備にかかる。さすがに獣医さんご夫妻は手際がいい。へその緒を縛るための木綿糸を十五センチ位に切りそろえて消毒する。鋏・注射器その他の医療器具や薬品類がたちどころに準備される。産まれた仔犬達は母親のお腹の辺りに潜り込みたがるが、次の仔が産まれそうになったら母親から離してやらないと押し潰される危険があるので、一時避難させて置くための箱を用意して中にタオルを敷く。産湯用のお湯を沸かしタライとタオルを揃える。お産は出血を伴うので敷替え用のシーツ類を積み上げる。

回りの動きをノイは不安そうな眼差しで追っている。切ない顔である。

「あ！産まれた！」

感激の瞬間である。それは、なにやら赤黒い粘膜に包まれた物体の出現であった。

「なんだか得体の知れない物が出て来て、わたし困っちゃった！」と云った顔でご当人は目をそらしている。人間が手を貸してやらなければ少なくとも最初の子は明らかにそのまま死んでしまったことだろう。仔犬を取り上げてやると母親は胞衣を食べようとするが、とても栄養価が高く食べ過ぎると逆に良くないそうで、産まれた子ども全部のものを食べさせてしまわない方が良いそうだ。

獣医さんは手早くへその緒を三センチ位の所で縛りカットし、切口に白い粉薬を付け、鼻腔を塞いでいる腹水を排出させるために、両掌で仔犬をそっと包み込む様に持って頭を外に向けて二・三ど大きく弧を描く様に振る。ぐったりしていた風なのが生気を見せ始める。お湯で体を洗ってやると元気に手足を動かし始めた。タオルで丁寧に水分を拭き取って、体重を量る。四三〇グラム。肢体健在、ちっちゃな耳と可愛い尻尾が付いている。鼻先に顔を近付けると仔犬独特の甘ったるい香りがする。ふわふわの真っ黒な産毛が密生した男の子である。母親のもとに帰してやると、もこもこ這って行って鼻先でお乳をまさぐる様はなんともけなげで愛らしい。午前十一時五十五分、第一子無事誕生である。

ぽんぽんぽんと次ぎから次ぎに何匹かの仔犬が産まれるのかと思っていたが、どうやらそうしたものではないらしい。次ぎが産まれる迄の間に汚れた産湯を捨て、シーツを取り替える。

第二子の誕生は午後一時二十三分。だいぶ時間がかかったのは産道で苦労したせいかぐったりして元気がない、カンフル注射の助けをかりて生気を得る。五〇〇グラム。肢体健全。同じく真っ黒な男の子であった。

三番目の子は一時四十三分。この子は元気だ。三九〇グラム。同じくブラックだが、今度は女の子だ。

四番目は二時一〇分。間隔がだんだん短くなった。四〇〇グラム。引き続きブラックの女の子。仔犬達の箱の中が次第に賑やかになってきた。まだまだ脚は立たないが前脚と後脚を上手に使っ

て這い回る。皆んな元気だ。

五番目は三時五分。もうそろそろクリーム色の子がとの期待がはしる。しかし、この子も真っ黒な男の子だ。四〇〇グラム。

六番目、三時十五分。四〇〇グラムの女の子。ブラック。

七番目、三時五十二分。四〇〇グラムの男の子。色は黒である。

八番目、四時十五分。四五〇グラム。女の子。やはりブラック。

九番目、五時四十六分。四二〇グラムの女の子。ブラック。

十番目、六時十三分。三八〇グラムの女の子。同じくブラック。

バンバンだったお腹がぐっとスマートになった。それにしても十頭とは大した数である。良くやった。最初は当惑げな眼差しで眺めていたノイも、一心に乳房を吸う仔犬達に母性本能を呼び覚まされたのか、次第に優しく慈しむ眼差しに変わって来た。

母体も子供達も無事である。次ぎの子こそはと待ち続けたクリーム色の赤ちゃんは遂に産まれなかったが、ぶち毛も身体に傷害の見える子もなく、全員健康なチビども誕生に祝杯を上げる。

4

仔犬達と過ごす最初の夜、母親はさすがに長時間のお産に疲れたのであろう、ぐっすりと寝入っている。我々を信頼し切っているのか、子供達を守ろうとして寝ずの番などと云う気配はまるでない。時々目覚めて「なんだか知らないけど沢山居るねえ」とでも云った顔で仔犬達をひとわたり見回すと、また寝込んでしまう。仔犬達も母親にすがりつく様に身を寄せている。ノイの体重は三十五キロは下らない。四・五〇〇グラムのチビどもの上に寝返りを打たれたら、可哀そうなパンダの赤ちゃんの二の舞である。人間の方が緊張気味に監視する。より寝心地の良さそうな場所を捜して、もこもこ動き回るチビどもはいくら見ていても見飽きない。初産の後の第一夜だけはやはり飼主の注意と手助けが必要な様だ。

無事、朝を迎える。潰れた奴は居なかった！ノイは一晩の熟睡で疲労を快復させた様で、食欲も旺盛である。母犬用のサイエンスと馬肉の定食をぺろりと平らげ、犬用の粉ミルクと市販の牛乳を混ぜたものをおいしそうにたっぷり飲んだ。仔犬達も皆、極めて元気に母親の乳房にしがみ付いている。器用に小さな二本の前足を交互に動かして乳房を押す姿も可愛らしい。母乳の出もすこぶる良い様だ。

ノイは、群がり寄るチビどもに対して、次第に母親らしい仕草を示し始めた。体の向きを変えたりする時にも、チビどもを跨いで歩く時にも身のこなしは極めて注意深くけなげである。小用に行きたい時にもチビどもが一段落して乳房から離れるのをまっている。

どうやら一安心である。三週間程は母親の具合いさえ良ければチビどもは母乳だけで育てた方が良い。母体にあるさまざまな免疫抗体が母乳を通して仔犬たちにも培われるからである。

犬の乳房の数は幾つと決っていない様である。八個の子も居れば十個の子もいる。中には奇数の子も居るのにはびっくりしたが、別に奇形という訳ではないらしい。ノイ子の乳房は八つしかない、それは胸先から下腹部にかけて左右対照に並んでいるのだが、下

腹部に近いもの程膨らみも大きく乳の出も良い様だ。当然チビどもの中でも要領の良い奴は、他を押し退けてその乳房に武者ぶり付いている。チビは十匹で乳房は八つだから、一斉にお乳を飲もうとすれば必然的に二匹があぶれることになる。人間の世界でも同じだけれど、集団の中には必ず遠慮深いのかおっとりしているのか、見ていると敏捷性に欠ける訳ではなさそうなのにいつも決ってあぶれる奴が居るものである。乳は溜った分が飲み尽くされると、次が溜るまでに少し時間を要するから、満腹した奴が譲ってくれた乳房ばかりにしかあり付けない子は気を付けてやらないと成長に遅れがでてくる。都合の悪いことに、チビどもの行動にも何かサイクル化した一定のパターンが有る様で、お腹がすくのも眠くなるのも排泄するのも、皆仲良く一緒である。かくて、あぶれの常連さんには多少の依怙ひいきをすることになる。

チビどもも一人前におしっこはするし、うんちもする。最初は母親にあそこをちょいと嘗められて、やっと出ましたって顔でちょろっとだった癖に、慣れてくるとフンフン云いながら頼もしくも堂々とやり始める、チビのことだから量的には可愛らしいものだけれど、なにせ数が多いから大変である。母乳だけの頃の排泄物はなぜか全然と云っていい程臭くない。そのせいかどうかは知らないけれど、清潔好きな母親はこちらが目を離していると自分で始末してしまう。獣医さんに依れば食べてしまっても、とりたてて害は無いそうだけれど、人間の目から見るとあんまり感じが良くないから、チビどもがその気配を示したら取り合いである。汚れたシーツを替えたり、お乳を飲みそびれている奴が居ないか注意してやる手数は掛かるが、仔犬達が母乳だけでお腹を満たして下れている間は楽である。

仔犬達の成長は驚くほど目ざましい。わが家では二日おきに体重を量ったが、八月十四日に四〇〇グラムで産まれた子が、十六日には四六五グラム。十八日・五五五グラム。二十日・六七〇グラム。二十二日・七四〇グラム。二十四日・八五〇グラム。二十六日・九六〇グラム。二十八日・一〇八〇グラム。三十日・一二三〇グラム。九月一日・一三九〇グラム。三日・一四六五グラム。五日・一五四〇グラム。七日・一六五〇グラム。二十七日目の九日には一八四〇グラムに成る。

足が立ち、ぱっちりと澄んだ目を開いたのは、十三日目。チビ同志がじゃれて相撲など取り始めるのが、十八日目。われわれ人間の顔を見て、初めて感情を籠めて尻尾を振ってくれたのは、二十一日目。真っ白の歯が見えて来たのは、二十二日目であった。そろそろ離乳の時期である。可愛らしく小さな小さな歯なのだけれど、こいつはチビどもの凶器でもある。最初の頃はいいのだが、次第に顎も力強くなって来る。乳房を吸われる母親の方はたまらない。がつっいた子に取り付かれると、乳房はたちまち血だらけと云う悲惨な状態になってしまう。離乳を急がなければならない。

三週間になった頃、獣医さんにお出願ってパルボ腸炎の予防注射をしてもらう。母体から受け継いだ免疫がこの頃には切れてくるのだ。生後二か月位の間は外部から訪れる人々や動物達との接

触は禁物だが、目にみえた接触はなくっても、悪い菌類がどういう経路で進入して来ないとも限らない。聞いた話しであるが、あるご婦人が、外で通りすがりに知らない犬にちょっと着ていた衣類を鼻先で触れられたばっかりに、大切な飼い犬を死なせてしまったそうである。注射の副作用が危険なものでないかぎり、出来る限りの予防策を講じておくに越した事はない。チビどもは別に痛がることもない。

5

獣医さんに相談して離乳食の献立表を作る。

最初の五日間位、チョビワンフレークに犬用の粉ミルクをぬるま湯で溶いて粥状にした物。これを一日に五回くらい。

次の三日間位は、それにデビフの黒缶を一匹につき茶匙一杯あて加えて与える。回数は同じで五回。

次ぎに、それにサイエンスのグロース（幼犬用）を一匹あたり三粒宛て、溶いたミルクで良くふやかして柔らかくした物を加え、排泄物の様子に注意しながら、具合いが良ければ、グロースの量を徐々に増量し、チョビワンフレークの量を減らしてゆく。グロースに慣れて来たら、回数を減らして四回にしても良い。水は適当に飲む様であれば飲める様に置いてやる。

これがわが家の離乳食メニューであった。余計なカルシューム剤や肝油などは一切与えない。メーカーの宣伝をする訳ではないが、チョビワンフレークなる物は完全栄養なのだそうだ。試みに摘んでみるとウエハースそっくりの味がしてなかなか旨い。初めて固形物を口にするチビどもが競ってよく食べるはずである。これは確かに高価で、他のメニューに較べれば割り高につく様だが、仔犬達の具合いが悪くなったりすることを考えれば、食べ物は良いと思われる最高の物を食べさせておいた方が、かえって安上がりである。但し、このチョビフンフレークなる物、どこのペットショップにでも置いてあると云う訳ではないのが苦労の種であった。出入りのフード屋さんに聞くと「うちでは扱っていませんので数十箱のケースをダースの単位でご注文を戴けるならお入れ出来ますが」なんて云う。冗談じゃない、目算ではその半分で充分だ。一時期だけしか食べない物を、そんなに大量に仕入れたって、後でおやつに与える訳にもいかないのだ。今から考えれば笑い話だが、山の鳥じゃないけれど、家に十匹の子が待つ身の時は、たちまち数箱を消費するから大変である。勤めの帰りになんとか数箱を手にいれて帰らないと子が飢える。かくてあちらこちらの扱っていそうなペットショップに電話を掛けて問い合わせることになる。あるデパートに掛けたときのこと、「もしもし、ペット売場お願いします。」

「はい、かしこまりました。」

「あのう、おたくにはチョビワンフレーク置いて有りますでしょうか？」

「は？チョロワンフレール、少々お待ち下さい。・・・あのう、お電話変わりました。そのワンフレールってどんな形の物でしょうか？」

「形って・・薄くって、ふわふわしてて、お煎餅位の大きさで、フレークだから形はフレーク状だけど。」
「・・・?あのう・・・何にお使いになられる物でしょうか?」
「何に使うって、仔犬の離乳に使うんだけど。」
「あ、失礼致しました。こちらペット売場でございます。ペット売場の方にすぐお電話お回し致しますから・・・」
あまり売れる物ではないらしく、たいていは三・四箱しか置いていないから、離乳が終わるまで何度かこんな苦労を繰り返させられた。

チビどもはグロースにすぐに慣れ、三十日位になるとミルクでふやかしたりしない方が歯ごたえがあって楽しいのか、ペースト状に濃く溶いた粉ミルクをまぶしてやると喜んで良く食べる様になる。そうなればもうチョビワンフレークもデビフの黒缶も本当に味付けの調味料的役割となり、一応離乳は成功である。

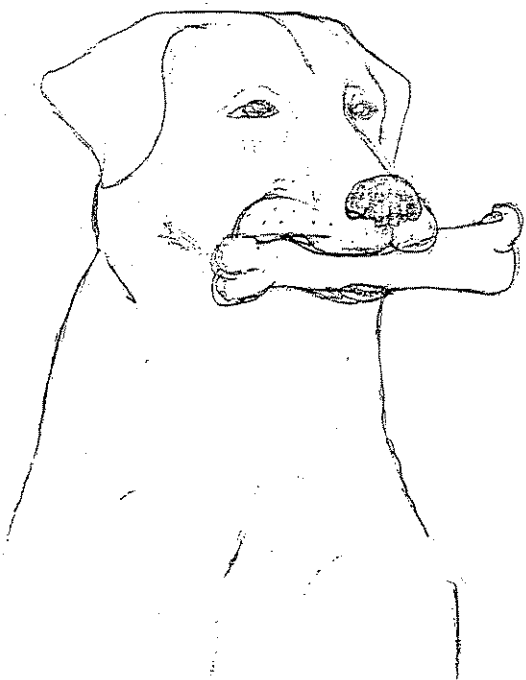
6

家の中でお産をさせて大変な事の一つは、仔犬達の便の始末をどうするかと云うことである。固形物を食べ始めると排泄物もそれなりに悪臭を放ち始めるが、ラブラドールはこんなチビでも清潔好きなのか「一隅に新聞紙を敷いてやると必ずそこで用を足す」と教えてくれた先輩の言に従ってみると、まか不思議、誰が教えた訳でもないのに、全員が公衆便所の空くのを待つかのごとき顔付きで、こちらが前の奴の始末をして、新しい紙を敷くのももどかしいと云った様子で飛び乗って来るのには驚かされた。先輩の言や聞くべしである。これで排泄物の片付けは非常に楽になった。大量の新聞紙をサークルの横に積み、汚れたら大型のビニール袋にどんどんすてる。かくて、わが家のごみすて日は、大きなビニール袋を幾つもさげて捨場へ往復という日常であった。

その間に、チビどもはどんどん大きく成り手足も逞しく成って、サークルを外すと、家中を集団で駆け回って運動会になる。勿論、最初に用意した十五センチ程度の板囲いなんかでは、ものの役には立たない。人間が跨いで出入り出来る程度の高さにとどめておきたいのだが、チビどもは脱出の天才だから、囲いは三十センチ、五十センチとだんだん高くならざるを得ない。それに伴って面積も広げてやる必要がある。わが家の寝室は次第に侵食されるという結果になった。が、意外なことに、いたずら大好きのチビどもが、今やサークルの中に取り込まれてしまって、使いものにならなくなることを覚悟した家具を噛むことも、サークルから出して自由に家の中を駆け回らせても、与えた物以外には勝手に本棚から大事な本を引っ張り出して困らされることもなかったのには感激であった。

四六時中われわれの顔を見ていられる場所でお産をさせて良かった最大のものは、チビどもが驚嘆すべき早さで人間の言葉を理解し順応するのを知った事である。ノイが家に来た時、それは生後四十六日目のことであったが、彼女は家内が台所に入ると、自分もどうしてもそこへ入りたがった。われわれがそれを阻止しようと台所の入口を塞いで立てた炬燵板に、それは彼女の体の何倍

もの高さで、どうしても飛び越えられる訳の物ではないのだが、懲りることなく何度も何度もどすんどすんと飛びついては滑り落ちるのであった。その根性には感心させられたが、いくら口で云っても止めようとしないのには閉口したものである。彼女と言葉で意志の疎通をはかれる様になる迄には時間を要したものである。それがチビどもは「入っちゃ駄目！」の一言で、何の仕切りも無い台所の前でどの子もぴたりと止まるのである。小さな尻尾をゆらゆらさせながら、そこに群がって時々はこの位ならいいでしょうとでも云いたげな顔で、前足でちょっとだけ台所の床に触ってみたりしている様はほほ笑ましい。「相手は犬なんだから分かる訳ないや」と云った、人間特有の傲慢さを捨ててぶつかってみる事である。ラブラドールの場合にはそうすればびっくりする様な反応が帰ってくる事請け合いである。

何やかにやでその夏の休みは、何処かへ遊びに出ることもならず、お産と子育てに明け暮れてしまったけれど、おかげでチビどもは全員無事さほどの大小の差もなく、平均した大きさでお腹を壊す子もなく健康に育って下れた満足感は他に代え難かったし、犬達にいろんな事を教えられた一夏でもあった。

後は可愛がってくれるはずの、新しいお家に引き取られて行く前に混合の予防注射をして、それぞれの旅立ちを見送る悲しみに耐えるだけである。